公開・国際シンポジウム「イメージとヴィジョン　東西比較の試み」

はじめに

秋山 聰／冨澤 かな

グローバル COE プロジェクト「死生学の展開と組織化」は、これまで「死生と造形文化」シリーズとして、2007 年 12 月の「聖遺物とイメージの相関性　東西比較の試み」[1]と、2008 年 5 月の「礼拝像と奇跡　東西比較の試み」[2]の 2 度に亘り国際シンポジウムを開催し、それらの報告書を日英両語で刊行してきた[3]。異なる宗教文化、宗教美術の比較を一つの柱として、死生と深く関わる造形イメージを様々な角度から考察しようという方針に基づくこれまでの成果の一部は、イギリス、ロシア、エジプト等の国際会議でも紹介され、それなりの評価を得てきている[4]。2011 年 2 月 13 日、同シリーズの 3 回目にして最後のシンポジウムとして「イメージとヴィジョン　東西比較の試み」が催行された。今回は思いがけずこれまでよりもやや規模を大きくすることが可能になったため、国内からは日本思想史の佐藤弘夫氏（東北大学）、日本仏教絵画史の増記隆介氏（文化庁）、中国仏教絵画史の井手誠之輔氏（九州大学）、仏教彫刻史の奥健夫氏（文化庁）、西洋中世美術史の木俣元一氏（名古屋大学）、海外からは西洋中世美術史の泰斗ハーバート・ケスラー氏（ジョンズ・ホプキンス大学）と西洋中世およびビザンチン美術史のミケーレ・バッチ氏（当時シエナ大学、現フリブール大学）、仏教学・神道研究のファビオ・ランベッリ氏（カリフォルニア州立大学サンタ・バーバラ校）に参加していただくことができた。今回、日本の西洋研究者（木俣氏）と海外の日本研究者（ランベッリ氏）にも加わっていただいた点が前

2回にはなかった試みと言えようが、これはより重層的に議論が交わされ得る場を作ろうと試みた故であり、東西宗教文化研究者のクロスオーヴァーをささやかながら実現する機会を設けることができたのは幸いであった。以下はその日本語による報告書であり、英語版は従来通り、別途 *Bulletin of Death and Life Studies* の1冊として刊行される予定である。

■註

1 和文は『死生学研究』第11号（2009年3月刊）に、「公開・国際シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性　東西比較の試み」」として所収。英文は Akira Akiyama / Kana Tomizawa/Kitazawa (eds.), *The Interrelationship of Relics and Images in Christian and Buddhist Culture, "Death and Life" and Visual Culture I*, (=*Bulletin of Death and Life Studies*, Vol.5), Tokyo 2009 として刊行。

2 和文は『死生学研究』第12号（2009年9月刊）に、「公開・国際シンポジウム「礼拝像と奇跡　東西比較の試み」」として所収。英文は Akira Akiyama / Kana Tomizawa/Kitazawa (eds.), *Miraculous Images in Christian and Buddhist Culture, "Death and Life" and Visual Culture II*, (=*Bulletin of Death and Life Studies*, Vol.6), Tokyo 2010 として刊行。

3 2007年12月に既にこれらの原型とでも言うべき小さなシンポジウム「聖なるイメージ：彼岸とのコミュニケーションの手段として」を、21世紀COEプロジェクト「死生学の構築」の主催として開催したが、その報告書は和文、英文ともに『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、20号（2007年）、pp.57-146に収載されている。

4 また英文報告書の刊行が機縁となり、編者の一人秋山が2012年7月にドイツ、ニュルンベルクにおいて開催される予定の国際美術史学会（C.I.H.A.）世界大会における「宗教とその美術における客体化についての比較文化的研究」セクションの共同座長に指名されるに至った。

（あきやま・あきら　東京大学大学院人文社会系研究科教授／グローバルCOEプログラム事業推進担当者）
（とみざわ・かな　東京大学大学総合教育研究センター特任助教／元グローバルCOEプログラム特別研究員）